

近代歴史学の父、ランケ

国立音楽大学名誉教授 佐藤真一

1. はじめに

ご紹介をいただきました佐藤真一と申します。この度はお招きいただきましたことを光栄に思い、感謝しております。今日は「近代歴史学の父」と呼ばれるランケ(Leopold von Ranke 1795-1886)を取り上げ、歴史学がどのような学問であるのか、またその魅力はどんなところにあるのかをお話しさせていただきます。

ドイツは地方色豊かな国ですが、南ドイツのアルゴイもドイツアルプスを望む美しい地域です。そのアルゴイを東ギュンツ川という川が流れています。その源流を知人のレンツさんという方の運転で訪ねたことがありました。その石には「東ギュンツ川の源泉(Quelle)」と刻まれていました。このQuelleという言葉は「泉」を意味します。この源泉から水が湧き出し、2、3キロほど先に行くと同幅は2、3メートルにもなり、やがてドナウ川に注いでいきます。このQuelleという言葉は、同時に「史料」をも意味します。泉はそこから水を汲みだすところ、史料はそこから過ぎ去った事実を汲みだすもの、と言ってよいでしょう。歴史学の対象はあくまで過ぎ去った過去の出来事であって、史料はその媒介をするものであります。すなわち歴史学は史料を手掛かりにして、過去の事実を探求する学問です。もちろん史料は書かれたものばかりではありません。しかし文書であれば、誰によってどのような意図をもって書かれたものであるのか、その文書は何をどこまで語りうるのか。そのことを確認するために、残されている史料を厳密に吟味しなければなりません。それを「史料批判」と言います。自然科学にとって実験を通じて法則を見出すことが学問の基礎であるように、この史料批判を深めることに近代の学問としての歴史学の基礎があります。

こうして、歴史の事実を探求する際に可能な限り多くの史料を収集すること、その史料を批判的に吟味することが重要になってきます。そしてこの吟味を徹底し研究の基礎としたのがランケであったのです。このことを念頭におきながら、ランケがどのようなプロセスを経て歴史に関心を抱き、歴史研究を生涯の課題とするに至ったのか、彼にとって歴史学の課題とは何であったのか、彼の歴史的な捉え方の特徴は何かを考察しようと思います。そのためにまずランケの生きた時代を概観しておきましょう。

2. ランケの時代

1795年、ランケはザクセン選帝侯国の小都市ヴィーヘに生まれました。当時ドイツは神聖ローマ帝国と呼ばれ、統一国家ではなく、300余りの国々（領邦国家）の集まりでした。冒頭で述べた地方色の豊かさということもこのことに関連しています。これら多数の国家のなかで大きな位置を占めていたのが、オーストリアとプロイセンです。ランケのザクセン選帝侯国はそのなかの中規模国家でした。当時、憲法も国民議会もなく多数の国家の連合体であったドイツにとって「自由」とともに、ナポレオンの支配下に芽生えた国民意識に基づく「統一」が19世紀の重要な課題となりました。

ランケが生まれる6年前、1789年、フランス革命が勃発します。これに対し、1791年、オーストリアとプロイセンは「ピルニッツの宣言」を発し、革命に干渉しました。これに刺激されたフランスは1792年オーストリアに宣戦布告し、プロイセンはオーストリアとともに参戦します。これ以後ナポレオン戦争の時期も含め20年余りにわたって革命戦争の時代が生じます。はじめは守勢に立っていたフランス革命軍も、同年9月ヴァルミーの戦いを機に攻勢に転じ、ライン左岸を占領しました。

ランケの生まれた1795年、プロイセンは対フランス戦争から離脱し、フランスとプロイセンの間に「バーゼルの和約」が結ばれ、ザクセン選帝侯国もこれに従います。これ以後10年、北ドイツに平和が訪れ、ヴァイマルでは、ゲーテとシラーの古典主義文学の花が開きます。そのような中でランケは穏やかな少年時代を過ごしました。プロイセンが対フランス戦線を離脱した後、オーストリアは単独でフランスと戦い、1805年、アウステルリッツの戦いで敗北します。オーストリアとプロイセンをのぞくドイツ諸邦はナポレオンを保護者としてライン同盟を結成しました。ここに神聖ローマ帝国は崩壊します。中立を保っていたプロイセンも1806年には宣戦し、イエナ・アウエルシュテットの戦いでナポレオン軍により壊滅的な敗北を喫しました。こうして全ドイツはナポレオンの支配下におかれました。このナポレオンの支配はドイツの近代化に貢献するとともにドイツの人々に国民意識を芽生えさせることとなります。ランケの少年時代はナポレオンの全盛時代でした。

このようなナポレオンによるドイツ支配の終わりのきっかけとなったのが、ナポレオンのロシア遠征の失敗でした。これを機に諸国民のナポレオンからの解放戦争が生じ、1813年10月のライプツィヒの戦いでナポレオン軍は敗れ、ナポレオンは退位します。

ナポレオン後のヨーロッパ国際秩序の立て直しのために開かれたのがウィーン会議（1814-1815年）でした。その取り決めの結果、自由主義と国民主義を弾圧する保守

的な国際秩序が生まれました。ドイツでは統一ドイツとは程遠い、35の君主国と4自由市からなるドイツ連邦が成立します。

こうした政治的状況の中で、ブルシェンシャフトと呼ばれる学生組合が「自由」と「統一」を求めて1815年にイェナ大学で結成され、彼らは1817年にはヴァルトブルク祭で意思表示を行ないました。さらにウィーン体制を揺るがすフランス七月革命の影響を受けて、ハンバッハ祭（1832年）やゲッティンゲン七教授事件（1837年）が生じます。その後、1848年には三月革命が生じ、メッテルニヒはイギリスに亡命し、ウィーン体制はその中心から崩れ、自由主義運動が展開します。しかしこの年の秋には反革命が進行します。三月革命以前はオーストリアとプロイセンの協調がドイツ連邦の支えでしたが、これ以後は両国の対立が顕著になり、ついに1866年、プロイセンがオーストリアとの戦争（プロイセン＝オーストリア戦争）に勝利してドイツ統一の主導権を握り、普仏戦争にも勝利し、ドイツ統一が実現しました。1871年のことです。こうした時代をランケは生きたのです。

3. ランケの批判的歴史学への道

〈シュールプフォルタ時代（1809-1814）〉

さて、少年時代のランケに戻りますが、彼は1809年、名門ギムナジウム（中高等学校）のシュールプフォルタに入学し、ギリシア語、ラテン語の原典に基づく徹底した人文主義教育を受け、古典に沈潜します。とくにタキトゥスを精読します。ここには歴史への関心の芽生えを見ることができます。すでに述べましたように、学校の外の世界は大きく変動していましたが、この時期までは時代の波はランケを捉えてはいなかったと言えるでしょう。

〈ライプツィヒ時代（1814-1818）〉

ところで注目されることは、その後1814年に始まるライプツィヒ大学の学生時代にはランケはまだ歴史学に疎遠であったことです。この年の5月、入学早々聴講した歴史学の講義はむしろランケを失望させ、専攻したのは神学とりわけ古典文献学でした。神学に関しては、当時のライプツィヒでは合理主義神学が支配的で、ランケはそれに飽き足らず、そのため教義学には深入りしませんでした。主たる専門は古典文献学であり、ライプツィヒ大学の誇るヘルマン、ベック両教授から指導を受けました。ヘルマンからはホメロスとピンダロスについて学び、ベックからはツキディデスに対する関心を引き起こされました。

歴史学への関心はまだ乏しかったとはいえ、ツキディデスのペロポネソス戦争史とニーブーアの『ローマ史』からは大きな影響を受けました。面白さを犠牲にしてもあくまで正確な叙述を目指したツキディデスについてランケは記しています。「散文家の中ではいまや私はツキディデスに向かい、それをもっとも根本的に通読した。私は彼の政治的教説を抜書した。彼は力強い大きな精神の持主で、ピンダロスの場合と同じく翻訳しようという考えは起こらずただ頭が下がった。原書を心に刻みつけ、それをできうるかぎり理解することが、私の考えた精いっぱいであったのである」(『ランケ自伝』林健太郎訳、岩波文庫、1965年、45頁)。

古代ローマ史に関する虚構と事実を区別し、リヴィウスの叙述を批判したニーブーアについてランケは、「私の歴史研究に最大の影響を与えたのはニーブーアの『ローマ史』であった」と述べています。

ランケが「古代史の新しい批判の創始者」と呼ぶニーブーアは、共和政初期のローマの研究にあたって、久しく権威とされてきたリヴィウスとハリカルナッソスのディオニュシオスの史書を考察の主要な手掛かりとしました。ニーブーアによればリヴィウスは古い伝承に無批判であり、それを切りつめたり想像に基づいて創作を付け加えたりしました。ディオニュシオスはより慎重ですが、彼においてもあらゆる根拠を欠いた、空想に基づいた主観性が見られます。こうして彼らは初期ローマ史の伝承の欠如や乏しさを事実の裏付けのない想像で埋め合わせようとしたというのであります。ニーブーアは指摘します。「批判的歴史家、あるいは判断を下す歴史家としての修辭家ディオニュシオスを語ることは無益である。見識のある権威としてのリヴィウスを私はすでに首尾一貫しない把握と矛盾のゆえに非難してよいだろう」。ライブツィヒの学生時代には歴史研究を生涯の課題とする決意をするには至りませんでした。ツキディデスとニーブーアから受けた影響は決定的なものとなりました。ランケはツキディデスをテーマにして博士の学位を授与されました。1817年初めのことでした。

さて、1817年は宗教改革300周年という節目の年で、多くの通俗的なルター伝が書かれましたが、ランケはそれに飽き足らず、あくまで原典に基づく厳密な伝記の執筆を試みます。その際ルターを当時の政治状況との関連で考察する必要を痛感しますが、そのための研究があまりに広がってしまったために途中で断念せざるを得なくなります。けれどもこのルター伝の試みはランケが歴史研究への第一歩を踏み出したと言えるでしょう。しかし明確な歴史家の自覚を持つに至ったのは、その後のギムナジウム教員時代のことでした。

なおこの1817年の秋にヴェルツブルク、ハイデルベルクを経て、ライン川に沿って徒歩旅行を企てたこともランケの歴史への関心、とくに中世ドイツに対する関心を

深める重要な経験となりました。ヴェルツブルクでは当時のロマン主義的風潮の影響を受けつつ巡礼教会のケッペレの丘を登り、ハイデルベルクではポアスレの収集した中世末期の絵画に深い印象を受け、ケルンでは建設が中断していたゴシックの大聖堂も見ています。過去への憧憬に基づく旅の経験が歴史への関心を深めさせることとなります。

〈フランクフルト・アン・デア・オーダー時代（1818-1825）〉

1818年秋、ランケはフランクフルト・アン・デア・オーダーのフリードリヒ・ギムナジウムの上級教員として着任します。ギリシア語、ラテン語、ドイツ語、それに歴史がランケの担当科目となりました。卓抜な古典語の能力と歴史に対する素養も評価されていたことが分かります。最初の2年は、授業準備として古代の歴史家たちの原典に沈潜しました。とりわけ翌年1819年に始まった「古代文学史」の講義のための準備は、歴史家ランケの形成に決定的となりました。ランケは語ります。「歴史研究をすでにそのうちに含む文献学研究や一般的な学問から本来の歴史研究への移行はきわめて容易になされる。こうした移行は私にとって、最上級生に古代文学史を講義するという課題を与えられたことによってとりわけ促された」（『ランケ自伝』56頁）。

この授業のなかで、歴史家たちの著作が大きな比重を占めていました。とくにローマ文学を考察するにあたって、歴史家の著作はその中心でありました。ギリシア・ローマの歴史家たちの著作をランケは読み抜きました。そうした原典に基づく授業準備を通じてランケは、出来事と出来事についての歴史家たちの報告との間の相違を理解し、歴史書の適切な評価のためには、歴史家の個性、その前提、意図を理解することが不可欠であることを学んでいきます。こうして古代の歴史家たちに即してランケの批判的な研究方法が確立します。

さてその後、授業準備と並行して、中世の歴史家の著作に対する関心も深まります。そうしたなかで、ルイ11世とシャルル8世の時代を克明に描いたコミーヌの『回想録』に感銘を受け、最初の書物の着想を得ることになります。こうして15世紀から16世紀初めの歴史に深い関心を抱き、1821年以後、その著作のための研究が進められます。

一方、ロマン主義の風潮の中で広く読まれ、ランケ自身もはじめは心動かされた歴史小説に対して疑問を感じるようになります。ランケはウォルター・スコットの『クウェンティン・ダーワード』を読み、スコットが実在の君主に彼らが抱いていた考えとは異なることを語らせていることに嫌悪を抱き、事実から離れているものを歴史学においては避けなければならないと心に決めたのでした。

すなわちスコットの叙述に見られる虚構に反発し、自らは想像や創作を避けて厳密

に事実を探求することを決意したのです。ここにも、ランケがツキディデスやニーブーアから学んだ批判精神が示されています。

このような研究や思索を背景として、1824年末に最初の著作『ロマン・ゲルマン諸民族の歴史。1494-1514』とその付録である『近世歴史家批判』が公になりました。前者の序文では「事実は本来どうであったか」を語ることが重要であるとし、さらに「事実の厳密な叙述は疑いもなく最高の原則である」と述べています。かつての歴史書をはじめ伝承されてきたものを批判的に吟味することが、ランケにとって歴史家の課題でありました。そのことを近世の歴史家に即して具体的に検証したのが『近世歴史家批判』と題する書物でした。この著作の中で、ランケは近世の多くの歴史家の著作を取り上げていますが、近世初頭の最大の権威とされてきたグイッチャルディーニの『イタリア史』を厳しく批判します。ランケによれば、本書のかなりの部分が格別の研究を伴わない、他の書物からの寄せ集めでした。この歴史家にとって「真理は重要ではなかった。当時イタリアではだれも歴史的演説から優雅さ以上のものを要求しなかった」とさえ指摘しています。

ランケに感銘を与え、最初の書物へのきっかけとなったコミーヌの『回想録』についても、史料としての吟味が必要であるとし、諸君主に対する個人的な愛憎の念が強く、叙述を左右しているからでした。すなわち、コミーヌはルイ11世には多大の恩義があり、シャルル勇胆公には反感を抱いていました。またシャルル8世のイタリア遠征を非難しています。こうした諸君主との個人的なつながりの印象が書物全体を貫いているとランケは述べ、したがってその記述を歴史叙述の基礎とすることには慎重でなければならないと指摘します。

〈ベルリン時代（1825-1827）〉

こうした卓越した史料批判に基づく最初の書物は高く評価され、ランケはベルリン大学員外教授職に任命されました。1825年春のことです。このベルリン大学教授時代（1825-1871、1834年、正教授）はきわめて実りの多い時代でした。フランクフルト・アン・デア・オーダー時代の最後の数年は、今後の研究のためには印刷されていない史料の閲覧が不可欠とを感じるようになりました。今やベルリンの王立図書館が所蔵しているヴェネツィア公使の報告書類がランケにとっての貴重な一次史料となります。ヴェネツィアは公使をヨーロッパのほとんどの宮廷に派遣しました。公使たちは2、3年の勤務を終えて帰国した後、滞在した宮廷に関して詳細な報告をしなければならなかったのです。滞在先の君主の人物、宮廷、大臣、財政、戦力、行政の状態、臣民の心情、さらには君主の他の諸国、とりわけヴェネツィアとの関係を報告する義務

がありました。こうした報告書の収集はヨーロッパ各地でなされていましたが、ベルリンの王立図書館は48巻の報告書を所蔵していました。

この貴重な史料を用いてランケは新しい書物を書きました。その表題は『16、17世紀の南ヨーロッパの諸君主と諸民族』でした。その副題は、「主として印刷されていない公使の報告書による」であります。

〈ウィーンおよびイタリア滞在期（1827-1831）〉

ところで、こうした研究をさらに深めるためには、ランケはさらに一步を進めなければなりません。すなわちウィーンとイタリア諸都市の文書館、図書館での史料研究でした。1827年秋以後3年半に及ぶ研究旅行となりました。まずランケが目に向けたのは、ウィーンです。1797年のカンポ・フォルミオの和約の結果オーストリアはヴェネツィアを獲得しました。その結果ヴェネツィアから運ばれてきたヴェネツィア文書がウィーンの本館に所蔵されていたのです。当時本館を利用することはとても困難でした。しかし、ウィーンでは、ゲンツやメッテルニヒの助力により、原史料の閲覧が可能になりました。ウィーン体制の中核にあるこの二人の恩義を受けたことは、ランケの政治の見方に保守主義への接近を促したことも注目しておきたいと思えます。

さらにヴェネツィアではサン・マルコ図書館、国立文書館、フィレンツェではメディチ文書館、ローマでは有力貴族の私的コレクションなど、各地の本館、図書館、私設図書館を歴訪し、手書き史料に沈潜します。

〈再びベルリン時代（1831-1886）〉

1831年3月、ランケは豊かな実りを携えてベルリンに帰還しました。当時フランス七月革命の影響がベルリンにも及び、革命と反革命の動きが交錯し騒然としていました。そのような状況のなかでランケは『歴史政治雑誌』の編集を引き受け、1832年から36年まで発行しました。この雑誌にランケ自身も24編の論文を載せました。これらの論文は政治的論議が渦巻くなかで時代の問題の背景を歴史的に遡りながら、南方研究旅行で集めた原史料を駆使して考察するものでありました。しかしそうした学問的姿勢は、多くの読者にとっては無益なものとなり、共感を得られなくなっていきました。『歴史政治雑誌』は1836年8月号をもって廃刊となりました。雑誌の役割についてのランケの見通しの甘さは明らかです。しかしここにわれわれは、時代の緊急の問題に対して歴史家として何をなすのかという問いに対するランケなりの応答を見ることができるといえるでしょう。

さて、この雑誌の編集がなされている時期と重なり合って、南方研究旅行の最大の成果である『ローマ教皇史』が公にされました。正確な表題は『ローマ諸教皇。16、17世紀におけるその教会、国家』(1834-1836)です。この書物はランケの著作の中でもっともよく読まれたもので、党派性のない叙述によりランケの名声を世界的なものにしました。

これに続いて、宗教改革の時代のドイツ帝国の発展を考察することがランケの次の課題となります。この課題の追究のため、ランケはドイツ各地、さらにブリュッセル、パリの文書館・宮廷・図書館を歴訪し、とくに帝国議会文書に基づく史料研究を続けていきます。その成果がランケの主著の一つ『宗教改革時代のドイツ史』でした。本書も徹底した一次史料の批判的な考察による研究成果でした。

ところで、こうした緻密な史料研究は、ニーブーアによる古代ローマ史に適用された史料批判を近世史に適用しようとするものと見る事ができるでしょう。しかしランケはニーブーアの史料批判をさらに深めようとします。ニーブーアはその史料批判の厳密さにもかかわらず、まだ伝承されたものに依存している面があるという理由からでした。ジーベルはこの点で「ランケはニーブーアにまさっている」と指摘しています。

さて、ランケの緻密な史料批判による歴史研究は、ベルリン大学の「演習」で具体的に指導されました。ヴァイツ、ギーゼブレヒト、ジーベルをはじめ多くの若者たちがランケの演習で学問的に鍛えられ、19世紀後半にドイツの多くの大学で歴史学を担う学者となっていきます。

また、ランケの歴史研究とは別個にペルツによって進められた大事業がありました。『ドイツ中世史料集成 MGH』の編纂であります。この史料集は、第1巻が1826年に公にされ、その後も続々と刊行されていきます。その編集協力者として、ヴァイツをはじめランケの弟子たちが師の推薦によって加わっていきます。こうしてランケの歴史的・批判的方法はドイツ歴史学の根幹として大きな貢献をなすこととなります。以上のことが、ランケの歴史学を支える「精力的な史料収集と史料批判の深化」であります。

今日多くの偽の情報が飛び交っていると聞きます。こうしたランケの批判的な吟味の姿勢は大いに参考になるはずです。

4. 「個性」と「発展」に関する新しい感覚の重視

さて、ランケにおいて近代歴史学が誕生する際にもう一つ大切な要因が加わってき

ます。それが「個性と発展に関する新しい感覚」でありました。

1854年秋、バイエルン国王マクシミリアン2世に対するベルヒテスガーデンでの連続講義でランケは語ります。「おのおのの時代はどれも神に直接するものであり、時代の価値はそれから生まれてくるものに基づくのではなく、時代の存在そのもの、そのもの自体のなかに存する、と。このゆえにこそ歴史の考察、しかも歴史における個体的生命の考察がまったく独自の魅力をもつ。けだし、どの時代もそれ自身価値あるものと見られなければならない、絶対に考察に値するものとなるからである」(ランケ『世界史の流れ』村岡哲訳、ちくま学芸文庫、1998年、15頁)。これは意義深い言葉です。この言葉は先立つ時代に支配的であった歴史観と対比してみると一層その深みが理解できます。

18世紀の啓蒙主義の時代には進歩史観が優勢でした。その捉え方によれば過去の因習的なもの、不合理なものは理性に基づいて克服されるべきであり、18世紀こそが文明の頂点とされました。さらに社会を変革していくならば、輝かしい未来が生ずるであろう、というのであります。このような楽観的な「進歩」の歴史観によれば、過去は克服されるべきものであり、過去が生み出した因習的なもの、不合理なものは排除されるべきでした。中世は暗黒時代であるという捉え方もこうしたところから生まれてくるものでありました。それぞれの時代に価値があるとしても、次の時代を準備するという意味においてであるにすぎません。ランケは最初の書物の中で次のように記していました。「人は歴史に、過去をさばき、未来の益になるよう同時代人を教え導くという任務を負わせてきた」と。

こうした「進歩」の歴史観に対してランケは、「すべての時代は固有の意義をもつ」といい、「進歩」に代えて「発展」という表現を用います。こうした歴史の捉え方によってこそ、歴史研究は固有の意義をもつこととなります。古代は古代の意義をもち、中世も独自の意義を持ちそれ自体固有の豊かな内容をもっているとのことです。

この「発展」と密接に関連しながら、「個性」という語の意義をランケは強調します。「個性」に関する感覚とは、時と場所を超えて人間と社会を一般化して考えるという自然法的な思考方法に対立するものであり、ゲーテの「個性は筆舌に尽くしがたい」という言葉に典型的に表れているのです。人間の内面における矛盾や混沌への鋭い感覚が必要とされるというのであります。それは個人だけでなく、国家に対しても同様でした。すなわち、国家のなかに豊かな個体的生命を見ていたのでした。

ランケの最初の著作の付録『近世歴史家批判』におけるランケの独自性は、彼があらゆる史料の中にそれを残した人間の個性を理解しようとした点にありました。

20世紀を代表する歴史家の一人マイネッケは『歴史主義の成立』（1936年）という

書物において、こうした「個性」や「発展」についての新しい歴史的感覚を「歴史主義」と捉え、西欧の思考が経験した最大の精神革命の一つとみなしました。そしてドイツ精神がなしとげた偉業であるといえます。この歴史的感覚はメーザーにおいて目覚め、ヘルダー、さらにゲーテで深められたものであり、ランケにおいて頂点に達する、とマイネッケは指摘しています。

こうした「個性」と「発展」という歴史的感覚をもって歴史を考察するランケにとって、中世は暗黒時代であるとする進歩史観は、克服されるべきものでした。むしろ中世の持つ豊かさをランケは強調します。ランケによれば中世という「この偉大な時期の内容は暗黒や隷属といった月並みな観念をはるかに超えている。この時期、われわれが属している諸国民が形成された。また諸国家が建設され、われわれが住んでいる大地がならされた。当時、われわれの祖先はそびえたつ大聖堂を建てた。われわれが獲得したもののうち、創造的なものはすべてこの時期にある」。「中世においては、あらゆる点で、土着の生活力が勢力を得た。諸国民は詩や美術、国家と教会、戦争と平和の巧みさに精通した。その意味で中世世界は、古代世界や近代世界よりも豊かで多様であった。中世世界は、多くの点で、例えば詩や建築術において、不朽の比類のない作品を生み出す独創的創造においてより実り豊かであった」。

晩年の大著『世界史』においてランケは、一層具体的に中世の輝きを様々な事例を通じて明らかにしていきます。

- ・キリスト教の発展に比類のない貢献をした「ドイツ人の使徒」ボニファティウス
- ・カール大帝の宮廷における文芸復興に中心的な役割を担ったアルクイン
- ・シトー会修道会の発展に努め、敬虔と学識により多大な影響を及ぼし、「普遍的尊厳の中心となりすべてに君臨する」クレルヴォーのベルナル
- ・際立って才能豊かな神学者のアベラール
- ・民衆たちに広く受け入れられた13世紀の二つの托鉢修道会の働き、すなわちフランチェスコ会とドミニコ会
- ・偉大な神学の星トマス・アキナスによって稀に見る輝きを得た大学
- ・新たな生命に満ち溢れたダンテの『神曲』
- ・ロマネスクやゴシックの大聖堂

こうした事柄の叙述のなかに、各時代の個性を理解し、進歩ではなく発展として歴史を考察するランケの立場をはっきりと読み取ることができるでしょう。中世を考察することなしには近代も理解できないとするランケの歴史理解の道は、こうした「個性」と「発展」の新しい感覚に支えられて開拓されたとみることができます。

こうした過去に向けられたランケの新しい歴史的感覚のまなざしは、ランケの時代

判断にも反映しているのではないのでしょうか。ウィーン会議の結果成立したドイツ連邦は、ドイツ統一を阻み自由主義を抑圧する国家体制でありましたが、三月革命以前にランケは各支邦の個性と多様性を尊重し緩やかな和合をむしろ望んでいました。

またランケが七月革命の影響下にフランスの国制を直接に導入しようとする自由主義的な論調に対してドイツの国家としての独自の個性を強調し、外国の国制の安易な需要を拒んだことにもその精神を見て取れるのではないのでしょうか。

5. おわりに

ランケにおいて史料の批判的研究と新しい歴史的感觉は、近代歴史学の二つの重要な支柱であると言ってよいでありましょう。このことはランケ以後著しく進展した歴史学においても大切な遺産として重んじるべきであると考えています。

こんにちも世界で、また日本で様々な出来事が生じています。それらの出来事は一体どのような歴史的背景から生じてきているものなのか。現在をどのように受け止めればよいのか。そのように私たちは歴史に問うことができます。その際、史料(情報)の厳密な吟味に基づいて過去の事実を探求しなければなりません。しかも固定的な先入観を排して過去をやわらかな感受性をもって考察しなければなりません。そうするとき、歴史の豊かさを知るとともに、私たちが今、歴史の大きな流れの中のどこに立っているのかを理解できるようになることでしょう。また将来の方向を見定める前提をも得ることができるはずです。このことをランケの歴史研究から学ぶことができるのではないかと思います。

(質疑応答の後)

南山大学のこの美しい環境のなかで、優れた先生方の指導をいただきながら、心ゆくまでドイツ文化の勉強を続けて行なってください。遠くから皆さんに声援をお送りしています。ありがとうございました。

注記

本稿は2023年4月24日に行なわれた講演会の講演録である。